

【彙報】（平成二十九年四月〜平成三十年三月）

◎平成二十九年年度埼玉大学国語教育学会大会・総会

○平成二十九年十二月九日（土） 於埼玉大学

◇卒業論文構想発表会

（学部3年生 新妻 千紘）

◇研究発表

①稲垣足穂『一千一秒物語』における（月）の表象
香取 千尋（埼玉大学大学院2年生）

②『古事記』の他者観
関根 睦実（埼玉大学大学院2年生）

③ブランシヨにおける（文字）の存在論
―バルト論への補助線として―

◇シンポジウム「英語教育と国語教育の間」
（シンポジスト）
戸田 遼太郎（埼玉大学大学院2年生）
武田 ちあき

及川 賢

（埼玉大学教育学部言語文化専修英語分野）

戸田 功

（埼玉大学教育学部言語文化専修国語分野）

司会・山本 良

（埼玉大学教育学部言語文化専修国語分野）

◇総会

◎平成二十九年年度例会

○平成二十九年二月三日（土） 於埼玉大学

◇卒業研究発表

①青春小説の変遷について
尾崎 裕子

②日本演劇に関する通時的研究

―加藤周一の日本文化論を中心に―

松山 里奈

③頼山陽の政治観

鈴木 孝典

④交流を重視した対話的学習の研究
―相手や目的に応じて書く能力の育成―

関口 綾馬

◇研究発表（修士論文発表会）

①稲垣足穂『一千一秒物語』における（月）の表象
香取 千尋

②『古事記』の他者観
関根 睦実

③存在の引き受け
―ロラン・バルトの「エクリチュール」―

◇研究奨励賞授賞式

◇講演会

「国語教師として伝えたいこと」
手島伸行先生（元さいたま市立浦和高校教諭）

◎平成二十九年年度修士論文・卒業論文題目

○修士論文題目

稲垣足穂『一千一秒物語』における（月）の表象
香取 千尋

『古事記』の他者観
関根 睦実

存在の引き受け
―ロラン・バルトの「エクリチュール」―

○卒業論文題目
『蜻蛉日記』における「はかなし」観
辻 拓真

三島由紀夫『仮面の告白』について
作品の構造と性の倒錯

日吉優理子

「探究」と中等教育段階の国語科との関連に関する基礎研究
濱野天司郎

日本語におけるポジティブポラリティネス
清水 涼太

『火の鳥』論
中村 祐基

若年層女性における「かわいい」の意味に関する一考察
木下真依子

青春小説の変遷について
尾崎 裕子

『古事記』における葦原中国観
池本 慶太

対話的な小学校国語科学習指導の研究
―「読むこと」領域を中心に―
佐藤 直美

太宰治考
星野 瑞紀

日本演劇に関する通時的研究
―加藤周一の日本文化論を中心に―
松山 理奈

人間関係を育む国語科学習指導の研究
―コミュニケーション能力の育成―
新井 美貴

女性による自称詞「ぼく」の役割語的性質について
石川 竜也

ノルウェイの森における自我の喪失
鶴賀 久富

中学校における国語科学習指導の研究

—生活に生きて働く国語力の育成—

三沢 采子

今昔物語集の伝教観

渡辺 秀憲

色好みの文学史

—『平中物語』における色好み観—

直江 沙季

「チーム学校」における教職の専門性

武山 拓末

頼山陽の政治観

鈴木 孝典

百人一首の撰歌意図

齋藤 彩

交流を重視した対話的学習の研究

—相手や目的に応じて書く能力の育成—

関口 綾馬

谷川俊太郎の初期詩篇の独自性に関する一考察

和田真由子

「ら抜き言葉」に対する大学生の意識調査

—母語話者と日本語学習者を比較して—

河野 結美

実生活に生きて働く学力の育成

—伝え合う力とコミュニケーション能力—

田中 裕人

「全然」に関する規範意識と使用実態について

小島 有毅

江戸川乱歩研究

堀 篤史

ことばのしくみやはたらきへの関心を高める文

法指導研究

広瀬 桃菜

「小説の筋」論争と晩年の芥川龍之介について

渡辺飛沙也

学習意欲を高める国語科学習指導の研究

小林紗央里

高等学校における「読むこと」の学習指導研究

—『羅生門』を中心に—

富田 啓介

新語の発生・衰退とその語構成

朝日 亮太

古典教育の系統的指導についての研究

—「枕草子」を中心に—

西澤 優衣

読み聞かせに関する実践的研究

田中 義輝

大学生におけるあいさつ言葉

白石 将也

松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』

武田 紗希

清少納言『枕草紙』考

—語り手の自我意識という観点から—

柳 佳里

人称詞の使用実態

笹木 規秀

二分化される時間ループ物語とその時間感覚

大野 皓平

現代日本における演劇のメディアミックス的

徴について—2.5次元舞台を中心に—

麻生 優

「森見登美彦」研究—森見登美彦の作品世界

唐澤 岳海

◎第十九回埼玉大学国語教育学会研究奨励賞受賞論文

「青春小説の変遷について」

尾崎 裕子

「日本演劇に関する通時的研究

—加藤周一の日本文化論を中心に—

松山 理奈

「頼山陽の政治観」

鈴木 孝典

「交流を重視した対話的学習の研究

—相手や目的に応じて書く能力の育成—

関口 綾馬

「全然」に関する規範意識と使用実態について

小島 有毅

「ことばのしくみやはたらきへの関心を高める

文法指導研究」

広瀬 桃菜

「清少納言『枕草子』考—語り手の自我意識と

いう観点から」

柳 佳里

編集後記

埼玉大学国語教育論叢第22号をお届けします。今回も、哲学、文学、言語学、教育学をまたいで幅広い論稿を掲載することができました。さて、研究において共通することは、明晰さを追求することですが、「明晰さ」はドイツ語では「エヴィデンツ」と言うそうです。昨今、無自覚に「エビデンス」を振りかざす風潮があります、それはおよそ研究の精神とは縁のないものです。我々としては、ささやかであっても地に足を付けて本来の「エヴィデンツ」を追求していきたいものです。